

学 位 論 文 の 要 約

論文題目 鎌倉後期の王権と真言密教

申請者 坂口 太郎

本論文は、鎌倉後期の王権と真言密教との関係について、政治史・仏教史の両面より研究したものである。

一九八六年、網野善彦氏が「異形の王権」を発表して以後、後醍醐天皇の真言密教への傾倒に注目が集まるようになった。網野氏は巧みな史料操作と豊かな構想に基づいて後醍醐の宗教的側面を活写したが、近年では後醍醐の特異性を過度に強調することに批判が寄せられ、後醍醐の前提となった鎌倉後期の王権（とくに後醍醐の父・後宇多院）と真言密教との関係を重視すべきことが指摘されている。

ただし、近年の研究は後宇多から後醍醐への連続性を強調する一方で、後醍醐が後宇多の達成の上にかなる関係を密教と結んだかについての検討が不十分である。本論文ではかかる問題点を克服すべく、後宇多・後醍醐研究を一体化させ、鎌倉後期の時代相の中で王権と真言密教との関係を解明することを目指す。とくに、活字史料はもとより、未刊の古記録・古文書・聖教などの博搜に基づいた、実証的な研究方法を取ることを重視している。

本論文は、「はじめに」、序章、本論（第一章～第四章）、付論、終章より構成される。

まず、「はじめに」では、鎌倉後期の時代相を大まかに解説し、本論文の目標について簡潔に表明する。続いて、序章「問題の所在と本論文の視角・構成」では、鎌倉後期の王権と真言密教に関する諸研究を整理した上で、現在の研究状況を明らかにし、本論文の視角および論点を示す。とくに、明治期を起点として史学史の展開を意識しつつ研究の展開をつぶさに辿り、研究の現状と達成を確認した上で課題を具体的に提示している。

本論は四章よりなる。第一章・第二章は、大覚寺統の宗教権門である大覚寺門跡に注目したものである。鎌倉後期に後宇多院によって創り上げられた大覚寺門跡は、持明院統が掌握していた仁和寺御室に対抗する上で重要な宗教的拠点であり、横内裕人氏の論考に代表される多くの研究があるが、積み残された課題も少なくない。そこで、後宇多による後継者の育成や、後醍醐政権との関係を含めた、より大きな見地から研究を進めた。

第一章「鎌倉後期・建武政権期の大覚寺統と大覚寺門跡—性円法親王を中心として—」では、後宇多の皇子で大覚寺門主となった性円法親王に注目し、後宇多・後醍醐の時代における大覚寺門跡の展開を通時的に検討している。真言密教の諸法流を相承した後宇多は新たに後宇多院法流を創始したが、その後継者として皇子の性円を据え、大覚寺門跡の權威の拠り所とした。また、後宇多は性円に多くの寺領・重宝を相伝するほか、性円とともに大覚寺統を護持する密教修法（「大法」）

を勤修している。後宇多の死後、大覚寺統の家長となった後醍醐は、性円と大覚寺門跡を手厚く保護するだけでなく、皇子・恒性を大覚寺に入れ、討幕計画を進める上でも大きな期待を寄せた。大覚寺門跡は、建武政権の宗教政策の根幹に位置し、性円は後醍醐の王権を支える重要な役割を担ったのである。

第二章「東京大学史料編纂所蔵『五大虚空蔵法記』について—後醍醐天皇と後宇多院法流—」では、新史料『五大虚空蔵法記』（東京大学史料編纂所蔵）の全文紹介・書誌的検討を行うとともに、これにもとづいて、建武政権期の大覚寺門跡（後宇多院法流）と後醍醐との関係に考察を加えている。とくに、性円が後醍醐護持を目的とした密教修法である五大虚空蔵法を勤修したこと、建武政権が大覚寺門跡の寺格を引き上げたこと、性円周辺の真言僧の多くが建武政権のみならず南朝に祇候したことなどを指摘している。あわせて、『五大虚空蔵法記』に見える、鎌倉北条氏の余類による蜂起の計画を取り上げ、同記が建武政権期の政治史史料の欠乏を補う上で、貴重な価値を持つことも指摘している。

次に、第三章・第四章は、鎌倉後期から建武政権期に至る政局に、後醍醐の密教への傾倒がいかに関係していたのかを詳細に論じたものである。この問題については、網野善彦氏の「異形の王権」が重要な先行研究であるが、その見解には大きな飛躍も見られるだけに、新たな視角から後醍醐の王権の宗教的特質を論ずる必要がある。そこで、八〇年代以降の仏教史や仏教文学における多様な研究成果を踏まえ、王権の象徴性に関わる重宝（宝物）や密教儀礼からアプローチを試みる手法を取った。

第三章「後醍醐天皇の寺社重宝蒐集について」では、後醍醐による寺社重宝の蒐集に注目している。鎌倉後期の後醍醐は、山門前唐院経蔵・東寺宝蔵・伊勢外宮などより由緒ある重宝を数多く召し上げ、これを二条富小路内裏に集積していた。また建武政権期に入ると、後醍醐は東寺・神護寺・唐招提寺などの諸寺の重宝の管理に介入し、自己の勅封を加えている。後醍醐の重宝への関心は、黒田俊雄氏が指摘したような寺社統制策の一面もあったが、同時に見逃せないのは、重宝が後醍醐の政敵調伏を祈願する密教修法に用いられた事実である。すなわち、後醍醐にとって、重宝は政治的危機を乗り越える上での力の拠り所であったと考えられる。また、後醍醐は本来一代限りの天皇であっただけに、その権威の補強が必要であった。後醍醐は多くの寺社重宝を蒐集することで、その権威の強化を計ったのである。

第四章「鎌倉後期宮廷の密教儀礼と王家重宝—清浄光寺蔵「後醍醐天皇像」の背景—」では、網野善彦氏が注目して一躍有名になった、清浄光寺に伝来する「後醍醐天皇像」の背景について論じている。この後醍醐像については、つとに黒田日出男氏が緻密な読解を試みたが、画像の重要な前提をなす、後醍醐が文観より伝受した密教儀礼の分析に課題を多く残している。そこで、後醍醐像に描かれた装束の正体が、内蔵寮礼服蔵に伝来した古代の天皇にまつわる冕冠十二旒や礼服であったことを解明した上で、後醍醐がこの密教儀礼に即位灌頂の意味を込めていたと論ずる。即位灌頂は天皇権威に直結する儀礼であり、討幕を目指す後醍醐は、かかる儀礼を行うことで超越的権威の

獲得を企図したと考えられる。

付論「建武政権・南朝と院政—後院の設置を中心として—」は、後醍醐・南朝による院政の構想について論じたものである。古来、後醍醐は天皇親政を絶対視する立場から、親政を掣肘する摂関政治・院政・幕府を排除したとされ、この評価は戦後の政治史研究でも継承されている。しかし、近年の研究によれば、建武政権には鎌倉後期の院政との同質性が数多く認められ、かつてのような復古政権として捉える理解にも疑義が示されている。後醍醐に対する伝統的なイメージが払拭されつつある現段階では、むしろ後醍醐は院政を実現しえなかったと考えるべき余地がある。とくに、重視すべきは、鎌倉末期・建武政権期において、天皇が譲位に備えて設置する後院の存在が確認されることである。この事実は、後醍醐と院政との関係を再考する上で極めて重要である。そこで、鎌倉末期から南北朝期の後醍醐を取り巻く政治過程に再検討を加えるとともに、後醍醐を継承した南朝の後院や、長慶院政をも視野に入れつつ、後醍醐による院政の構想を論じ、既往の後醍醐像の克服を目指した。

終章では、本論文の主要な論点を整理している。また、今後取り組むべき課題のなかから、後宇多の密教興隆に果した高野山の役割や、後醍醐の討幕活動と文観との関係などを取り上げ、それぞれについて若干の展望を示して結びとする。